

## ドイツ語による歌唱指導研究 I

～中学生へのドイツ語発音指導～

宮下 茂（長崎大学教育学部）

### はじめに

「ドイツ語は、口から自然に流れ出る母音の上を、口のどこかを塞いだり、摩擦したりして生まれる子音が乗っていく美しい流れの言語である。」（注 1）、そして、「母音とは呼気が口腔内で何の妨害も受けず、噪音を立てることなく流れ出る持続可能な共鳴音といえる。」（注 2）と梶木は述べている。ドイツ語の子音について、「多数の子音は母音を際立たせるためのものであり、ランナーの助走のようなものだ。助走が徹底的であればあるほど、母音の跳躍は力強く、高みにのぼる。」「いずれもそれらの助走があるからそのあとの母音がより明るく、あるいは、より深々とひびく。」（注 3）と小塩は述べている。筆者は、これらドイツ語の発音を表すためには調音器官を規則的に動かし、その形状を整えることと、息と音声の流れの理解が必要であると考え。そして、ドイツ語の音声の美しさを表そうとする行為が、歌唱における音声の音楽的な美しさを表そうとする行為と同様であり、日本語歌唱の音声の音楽的な美しさを表す行為にも共通すると考える。その考えから、学校教育の音楽授業における歌唱においても、ドイツ語歌唱をきっかけとし、調音器官の活用（発声法）を学び、それを日本語歌唱へと結びつける指導も可能と考えている。そのためのドイツ語の発音と音声の美しさを表現する指導法の研究が有益であると考え。

今回、筆者は中学生を対象としたドイツ語歌詞を含む合唱曲の指導の機会を得た。その指導実践を基に、本論分においてドイツ語歌唱に対する筆者の考え、指導内容等を述べることとする。それにより筆者の考えを明らかとし、音楽授業でのドイツ語歌唱の指導法を考察する。

### 今回の指導について

今回の指導は、教育実践センター教育支援の一環で諫早市立森山中学校の依頼により行われた。同校合唱部（女声合唱）では、力田和歌子教諭の指導の下、ツェーラー・フライシュレン作詩、信長貴富訳詞・作曲、女声合唱とピアノのための「くちびるに歌を」第 4 曲、「くちびるに歌を」に取り組んでおり、そのドイツ語詞の歌唱指導を請うものであり、平成 25 年 3 月 27 日に訪問指導した。尚、同年 1 月 15 日に、力田教諭へドイツ語のディクションをあらかじめ助言し、教諭による指導が行われた後、筆者による合唱指導を行った。

## 事前のディクシオン内容

事前のディクシオンとして、ドイツ語の読み方のポイントを助言した。

主なポイントは、(1) ドイツ語のもつ音声の美しさを表すために、表記されたつづりに臆することなく、発語のための呼吸を整え、歌唱と同様に呼吸を深め、ローマ字読みをする。(2) 母音の長短、明暗の違いを捉える。(3) ローマ字読みのできないつづりの音声の特徴を捉える。以上三点であった。その中でも、特に注意を促したのは、(2) の母音の長短、明暗の違いであった。

一般的に、ドイツ語を読む際、難しいと感じさせるのは(3) の特殊なつづりの部分であり、そこに注目が集まると共に、その難しさの解消に練習時間を割くように思われる。しかし、ドイツ語の読みで重要なのは(2) の母音の長短、明暗の違いであると、筆者は考えている。その違いがドイツ語の言葉の美しさの特徴づけ、更に、母音の長さの違いが音楽的な音声の長さの違いに表れ、＜ドイツ語らしさ＞を決定付けると考える。

今回の合唱曲のドイツ語詞(【表 1】)では、母音[ア]の[a]と[a:]の違い、母音[イ]の[i]と[i:]の違い、母音[エ]の[e]と[ɛ]の違いの区別が、旋律にのせた際の音色とフレーズ感に大きく影響を及ぼすと考え、そのようにディクシオンを助言した。

## 森山中学校合唱部について

森山中学校合唱部は、力田和歌子教諭の指導により同曲の練習を重ねていた。聴取した初めの印象では、ドイツ語の発音や歌唱に困難さを感じさせる部分はなく、力田教諭の指導に寄って、事前のディクシオンが充分伝えられていた。

また、指導時の印象では、ドイツ語歌唱に限らず、生徒の能力の高さが垣間見られた。歌唱しながら、直前に助言された内容を考え、応用することができ、フレーズの途中からの歌唱はおろか、一つの単語でも、単音でも、難なく歌唱できた。そのため、取り出した一音から、一音ずつさかのぼって歌唱していくような、高度な練習も可能であった。よい指導者に恵まれ、生徒一人ひとりがその環境を十分に生かした、理想的な合唱部といえた。

【表 1】ドイツ語歌詞部分(詞と発音記号)

Hab' ein Lied auf den Lippen
[ha:p][aɪn][li:t][auf][den][lɪpən]
mit fröhlichem Klang.
[mit][frø:liçəm][klaŋ]
und macht auch des Alltags
[unt][maxt][aux][dɛs][alta:ks]
Gedränge dich bang!
[gədrɛŋə][dɪç][baŋ]
Hab' ein Lied auf den Lippen,
[ha:p][aɪn][li:t][auf][den][lɪpən]
dann komme was mag!
[dan][kɔmə][vas][ma:k]
Das hilft dir verwinden
[das][hɪlft][di:r][fɛr'vɪndən]
den einsamsten Tag!
[den][aɪnzamstən][ta:g]

## 中学校での実践指導

### ステップ1：言葉の意識

まずは、練習をしてきたままの生徒の演奏を聴取した。その演奏は統制の良くとれた、歌声の響きのよい演奏であった。しかしその反面、印象の薄い、あまり<心に残らない>演奏であった。それは、発音への注意、演奏をそろえる意識の現われと思われ、楽曲への一人ひとりの意識の薄い（自分の気持ちを感じさせない）演奏に思われた。演奏前の生徒の挨拶や返事の際、全員が声をそろえて発語していたが、常に一呼吸、間を置くことによってタイミングを合わせていた。その様子と鑑みると合唱団として演奏をそろえる意識の強さが特に感じられた。その集団として統制を取れることが、演奏では必ずしも魅力に感じられないと思われた。特にドイツ語の持つ言葉の意味や、詩人の言葉の持つ<生命感>が感じられなかった。

そこで、言葉「こんにちは」を発しながら、各自が言葉に対する自然な意識を持てるように指導を行った。（【表2】）

ここでは、①から④に進むにしたがって、発音への注意が行き届いた正しい歌唱に変わって行く

が、その反面、言葉としては不自然に聞こえてしまう。①と②では、一人ひとりが言葉のイメージを持ち、違いをつけて発語している。そのイメージは、言葉を発する前に生まれている。それらを理解させ、ドイツ語の歌唱も同様であり、発音の注意にとらわれ、言葉が不自然になってしまわずに、一人ひとりが自分の伝えたい言葉や音楽のイメージを持って歌唱するように促した。その結果、演奏が伸びやかとなり、ドイツ語の語感と母音の膨らみ（音の膨らみ）が聴かれ、初めの演奏とは異なる、<心に残る>演奏となった。

【表2】「こんにちは」の発語練習手順

①「こんにちは」（自分の日頃の挨拶言葉）

②「こんにちは」

（合唱団の歌声のようにそろえた挨拶言葉）

③（歌声でゆっくりと発声）



④（子音を強調した歌声で発声）



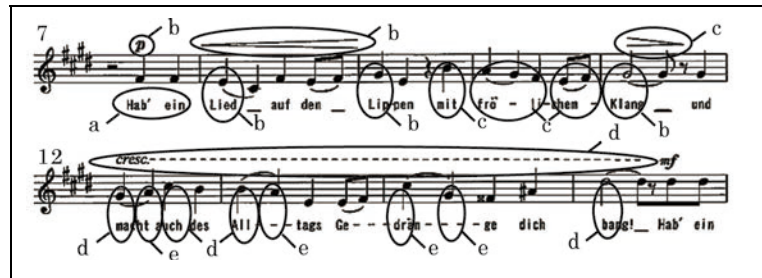
### ステップ2：言葉と楽譜の表現

次にドイツ語の発音と語感を意識しながら、楽譜に書かれた表現を忠実に歌唱できるよう指導を行った。

この楽曲では、ピアノによる7小節の前奏の後、ドイツ語歌詞が歌われ、そし

て日本語歌詞とドイツ語歌詞が交互に歌われていく。途中の 8 小節のドイツ語歌詞（45 小節～52 小節）を除く、2 つのドイツ語歌詞部分（7 小節～27 小節、85 小節～106 小節）はアカペラで歌われ、その他、日本語歌詞部分にはピアノ伴奏が付随する。このアカペラ部分でドイツ語の言葉の持つ音楽的な力を生かし、拍子に縛られることなく、言葉をロマン的に自由に開放させることが求められていると、筆者は考えた（注 4）。そして、そのような演奏ができるよう指導した。尚、ドイツ語歌詞に大きな違いがないため、指導時間の都合上、初めのドイツ語歌詞部分（7 小節～27 小節）の歌唱指導を行った。

【表 3】譜例：Soprano 抜粋（7 小節～15 小節）



【表 4】「たちつてと」の発語練習手順

- ① 「たちつてと」（普通の言葉）
- ② 「たちつてと」（無声音）
- ③ 「ta-chi-tsu-te-to」  
（息の混ざった無声音＝有気音）
- ④ 「t(a)-ch(i)-ts(u)-t(e)-t(o)」  
（息を止めるような無声音＝無気音）
- ⑤ 「ta-chi-tso-tε-to」（無気音と母音の組み合わせ）

ドイツ語歌詞部分（7 小節目）では、歌い出しから一音の中に潜む言葉のリズム感を出し、言葉に注意をしながらも、おおらかな歌声による歌唱ができていた。（【表 3】）しかし、[ha:p] が [x-ap] のように聴こえ、[ain] が [a:in] のように聴こえるなど、ドイツ語の母音の明るさ、＜強さ＞や＜気質＞、二重母音の＜柔らかさ＞などが呼気の音に混ざり、聴こえてこなかった（気音[h]の混ざった有気音になっていた）。（【表 3】-a）

そこで、言葉「たちつてと」を発しながら、有声音と無声音の区別、有気音と無気音の区別をつけ、その後に子音と母音の意識をもって歌唱する指導を行った。（【表 4】）

この冒頭部分でフライシュレンの詩は、まるで＜勇気を与える＞かのように、「Lied（歌）」「Lippen（唇）」「Klang（響き）」と、舌先に力を入れ、＜踏みしめる＞かのように発する子音[l]を基調とした言葉を重ねている。作曲者はそれらの言葉を強拍に置き、cresc. でフレーズを膨らませて行く。そのため、p の「Hab（持つ）」を＜大切＞に＜懐に収めるよう＞に歌い出し、拍の手前で子音[l]の舌先の力を入れながら、母音の＜輝き＞を引き出し、3 つの子音[l]の音量（強さ）のバランスを考え、＜Lied＝喜びの歌＞（注：生徒のイメージ）を思わせる cresc. の歌唱ができるように指導した。（【表 3】-b）そして、cresc. で行き着いた「Lippen」の印象が「Klang」にたどり着いた後 decresc. できるように、「Lippen」の音量（子音の強さ）に「mit（～を伴い）」の音量（子音の強さ）を合わせ、その＜達成感

>を表すように「fröhlichem (ほがらかな)」を歌唱し、豊かな歌声で「Klang」に結ばれるよう指導した。但し、「fröhlichem」で歌声をく使い切らないよう、「-chem」でく抑える>工夫を行った。(【表 3】-c)

続く 12 小節から、フライシュレンの詩は、「macht (～させる)」 「auch (～であっても)」 「Alltags (日常)」と＜開放的＞な母音[a]を基調とした言葉を重ねて行く。しかし、その言葉は「bang! (不安)」へたどり着く。その原因となるのが「Gedränge(困難)」である。作曲者は、それを下三声部のハーモニーの上、**Soprano**のパートソロで表している。そのパートソロが、4 小節の長い＜ロード（たどり着くための道のり）＞で、*cresc.*を続けながら歌唱される。（【表 3】-d）ここでのパートソロは、下三声部のハーモニーの動きに縛られることなく、＜勇気を持って挑む＞ように、「macht」「auch」「Alltags」の3つの母音[a]を明るく、はっきりと歌唱しなければならない。但し、スラーのかかる2拍目の音の動きが＜走って＞しまわないよう、2拍目で下三声部の動きに気を配り、スラーのかかる前後の音の動きに緩急を付けなければ、この＜ロード＞を乗り切ることが困難となる。また、「Gedränge」のニュアンスが＜生温く＞ならないように、「-dr-」をはっきりと素早く発音する必要もある。この4小節が、ドイツ語歌詞部分の＜山に向かう＞重要な部分となっている。この内、＜深み＞と＜明るさ＞を兼ね備えた3つのドイツ語母音[a]の歌唱の効果は、4小節の*cresc.*を実現すると共に、ドイツ語歌唱やロマン的な音楽特有の小さなくうねり＜や＜揺らぎ＞を生み出すことにもなる。（【表 3】-e）

このパートソロの動きと下三声部のハーモニーの動きは、動きの違いが大きく、指揮の動きに忠実な中学生の演奏にとって、かなり困難な部分となった。そのため、できる限り（走り過ぎないように注意しながら）パートソロは＜指揮の動きの前に出る＞つもりで歌唱し、指揮者が下三声部をまとめながら、パートソロを縛り付けることなく、全ての声部のエモーションをまとめ上げるように助言した。

続く 16 小節から、「Hab ein Lied auf den Lippen (くちびるに歌を)」が繰り返される。しかし、単なるリフレインではなく、ここでは全てを受け入れる＜覚悟＞＜勇気＞が試されている。そのため、子音 [l] の力を借りながら 「Lied」

「Lippen」をしっかりと響かせる。表記された *decresc.* に従いつつも、弱めすぎないように「dann (そして)」を挿ん

【表 5】譜例：Soprano 拔粹（17 小節～20 小節）

17

Musical score for the song 'Lip - pen, dann kom - me, kom - me, was mag! Das hilft dir'. The score is written on a single staff with a treble clef and a key signature of two sharps (F# and C#). The tempo is marked 'Allegretto' and the dynamics are 'f' (forte) and 'mp' (mezzo-piano). The lyrics are written below the staff. The notes are: Lip - pen, dann kom - me, kom - me, was mag! Das hilft dir. The notes for 'kom - me, kom - me' are circled, and the notes for 'Das hilft dir' are also circled. The notes for 'was mag!' are marked with a cross.

だ後、次に発せられる「**komme**（やって来る）」では、日本語的な発音で[komɛ]と裏打ちの強弱にならずに、ドイツ語の発音[kɔmɐ]に従い、強拍を強めなければならない。そして、「was mag!（起こり得る全てのもの）」を、心に（胸の中に）＜深々と広げるよう＞に歌い上げる。それが、楽譜に記された *cresc.*、*decresc.*

を表現して行く。その直後に訪れる静寂（四分休符）の後、「das hilft dir（それがあなたを救う）」で 3 つの母音[a][i][i:]を極限まで伸ばすつもりで、あたかも＜コラールの始まり＞であるかのように歌唱し、「verwinden（克服する）」で結ばれる。（【表 5】）

続き、22 小節の decresc. の中、Mezzo(Soprano I)が＜克服される＞べき「den einsamsten Tag!（孤独な日）」を歌唱し、他のパートが先導する形で「Hab ein Lied auf den Lippen（くちびるに歌を）」を繰り返し歌唱し、ドイツ語歌詞部分が終わる。

【表 6】 譜例：Soprano と Soprano I 抜粋  
(22 小節～24 小節)

この部分で特に注意が必要であったのは、Mezzo(Soprano I)に対し、他のパートの歌声が良く出ているものの、バランス的に強すぎることであった。ここでは、decresc. で弱められる「den

den einsamsten Tag!（孤独な日）」が、p から f へと繰り返しながら強められて行く「Hab ein Lied auf den Lippen（くちびるに歌を）」に、徐々に＜溶け込まれていくよう＞なく感動＞が描かれている。そのため、Mezzo(Soprano I)に対し、その他のパートはドイツ語の母音の美しさは残しつつも、＜暖かく包み込む＞ように＜見守りながら＞、音量のバランスを保ちながら歌唱するように指導した。（【表 6】）

## おわりに

今回指導した楽曲は、中学生に読み解くには難解なものであった。そのため、詞や言葉の内容を、できる限り噛み砕き助言をおこなってきた。ドイツ語の持つ音声の美しさの表現にあたっては、本来聴かれるべき音色、音量バランスを、間接的なイメージを与えることで補い、表現に変えていった。

その内、子音の持つ役割が大きく作用し、ドイツ語特有の母音の表現が可能であることが分かった。

筆者は、ドイツ語発音の生み出す、これら発音・発声の変化を基に、今後もドイツ語による歌唱指導研究を継続する所存である。

- (注 1) 梶木喜代子「ドイツ・リートへの誘い～名曲案内からドイツ語発声法・実践まで～」p.300, 2004 年, 音楽之友社。
- (注 2) 梶木喜代子「ドイツ・リートへの誘い～名曲案内からドイツ語発声法・実践まで～」p.303, 2004 年, 音楽之友社。
- (注 3) 小塩節「ドイツ語とドイツ人氣質」p.14, 1988 年, 講談社。
- (注 4) 作曲者は、楽譜冒頭に作品についての思いを綴り、この楽曲にロマン的な表現を求めている。